



東京交響楽団が今シーズンの演奏会に掲げたモットーは、「アフター・シューマン」。

音楽監督ユベール・スダーンに、このプロジェクトにかける意気込み、さらに今回自身が指揮するブルックナー「交響曲第9番&テ・デウム」を中心に、お話を伺った。

(取材／文：船木篤也)

After Schumann〜ロマン派の作曲家たち〜

ユベール・スダーン × 船木篤也

音楽監督

音楽評論家

——早速ですが、スダーンさんにとってブルックナーの音楽とは、どのようなものですか？

スダーン：ほとんど宗教のようなものです。演奏中は礼拝に接しているような気持ちになります。演奏家としての自分を前面に出してはならず、音楽にひたすら奉仕する。ブルックナー自身たいへん敬虔な人だったでしょう。今回演奏する第9交響曲は、はっきりと「愛する神」に捧げている。私自身ローマ・カトリック信者で、子供時代には教会の行列に参加し、その管楽オーケストラでホルンを吹いていたんですよ。父が指揮をして……。ブルックナーの音楽には大聖堂を感じます。そして果て知らぬほど長い。第9交響曲が素晴らしいのは、厳密な意味での「終わり」がない点です。聴き手は拍手をせずに、そのまま帰ってもよいくらいで……

——あの第3楽章、アダージョのあとでは……

スダーン：そう、あのアダージョのあとではね。大喝采を狙った音楽からは程遠い。この音楽を演奏するには、内的な静けさが必要です。私もこの年になり、以前よりもずっと心静かに、落ち着いて演奏できるようになったと信じています。ベルリオーズのような音楽では、一篇の風景画のように、映画のように描くことを心がけますが、そういう音楽とはまったく違うのです。

——ブルックナーは、キリスト教を信ずる者でなければ理解できませんか？ ヨーロッパには、「ベートーヴェンやブラームスならまだしも、ブルックナーの交響曲を日本人が分かるわけがない」と言う人もいます。

スダーン：世の中には本当にたくさんの傲慢がある。例えばシステーナ礼拝堂を日本人が大挙して訪れ写真を撮っているという眉をひそめるヨーロッパ人がいますが、そんな彼らの多くが、システーナ礼拝堂に行ったこともないんです。日本人は、とにかくシステーナ礼拝堂に興味を抱いて、そこまで出かけて行くでしょう。日本人の多くは、なるほどキリスト教信者ではないかもしれない。しかしどんな宗教でも、人生を耐えるものにしてしている点では同じです。ブルックナーに関していえば、私は日本でやることに何の心配もしていません。たくさんの方が聴きにきますから。ベートーヴェンの後期弦楽四重奏曲をやるほうが難しいくらいです。それに私が東京交響楽団と録音したブルックナーの第7を聴いた友人は、そのアメリカ的でない、ヨーロッパ的な響きに、みな驚いていましたよ。

——ブルックナーの第9は未完成の作品です。完成している最初の3楽章が終わったら、そのあとには何も演奏すべきではないという意見もあります。しかし今回は、このあとにブルックナーの管弦楽付き合唱曲《テ・デウム》を演奏なさいますね。

スダーン：ブルックナーがフィナーレを完成させようと意志したことは明らかで、出来上がった部分部分も残っている。これまで私は、カラガン版など、復元バージョンのフィナーレつきで演奏したことも、何度もあるんですよ。でもあれは非常に難しい。《テ・デウム》を選んだのは、これがフィナーレとちょうど同じくらいの長さである点がひとつ。いまひとつは、ベートーヴェンの第9や、メンデルスゾーン第2など、「賛歌」をうたう合唱で締めくくられる交響曲が、伝統的にあるか

らです。第3楽章のあとに休憩は入れません。私は立ったまま、合唱団と独唱者が入ってくるのを待ちます。

——「第9が未完に終わったらフィナーレの代わりに《テ・デウム》を演奏して欲しい」という、ブルックナー自身の遺言もありますね。それにしても、敬虔なカトリック信者であるブルックナーが、ミサ曲よりもむしろ交響曲に積極的だったというのは面白い。彼は、音楽表現の「装置」としての現代オーケストラに強い関心を寄せました。

スダーン：当時すでに、世の中の音楽体験そのものが変わってしまっていたから。大規模なホールに、大規模なオーケストラ。それにブルックナーは、ワーグナーのいわばお隣さんです [注：ブルックナーはワーグナーを崇拜した]。

——ブルックナーの交響曲を指揮していて、宗教的な象徴やほのめかしをお感じになることはありますか？ たとえば、#(シャープ)を十字架の象徴とみなす伝統がありますが、第9には、#のたくさん付く調がよく選ばれています。第2楽章・トリオ部の嬰へ長調(#6つ)、第3楽章のホ長調(#4つ)など。

スダーン：第9冒頭の、最初の最初をみてください。ここには一つの音しか鳴っていませんね。

——レの音だけですね。それもずっと続いていて……

スダーン：始まってから28小節の間、いろんな音がその周りを巡りはしますが、基本的にこの「レ」がいつもある。たいていの交響曲は、最初の小節に3度音程か5度音程を含んでいますね。だから雰囲気、普通とまったく違う。[神に対する]肅然たる賞賛なのです、これは。じっくりと時間をとるべきところです。長いレの音はオーボエも吹いていますが、本当に静かな音で吹かなければならず、フランス式のオーボエでは非常に難しい。ウイナ・オーボエ [注：ブルックナーの念頭にはウイーン・フィルがあったと思われる] ふうの効果を出すべく、私はここ展開部の冒頭で、いつも第3オーボエ奏者にイングリッシュ・ホルンを吹かせることにしています。私たちの第7の録音を詳しく聴いてくれたウイーン・フィルのコンサートマスター、ライナー・キュッヘル氏は、私たちにまだ足りないものがあるとしたら、それは「より深い音だ」と言っていました。彼は、ドイツ系のレパートリではホルンもウイーン式でやるべきだという考えですね。



© N. Ikegami

——「いっぽうの《テ・デウム》は、日本では滅多に演奏されない演目です。ご紹介を頂けますか？

スダーン：生への賛歌。神への帰依。頌歌。オルガンが加わり——ベルリオーズの《テ・デウム》でも主要楽器はオルガンです——、これを絶対に省いてはいけな作品。

——ハ長調で書かれているのは、おそらく偶然ではありませんね。

スダーン：ハ長調は、人間性を、生の純粹さを表す調なのです。もちろん、意識的に選ばれています。

——ブルックナーの音楽は宗教的なのに、——というよりむしろ「なので」？——うっとりするほど官能的なところもありますね。《テ・デウム》でいえば、たとえば第2曲 Te Ergo でのヴァイオリン・ソロなど。

スダーン：それから、そこでのテノール独唱など。しかしこれは、ブッチーニふうの「愛」とはなんの関係もありません。非常に抑制されたロマン的感情というべきものであって、決して通俗的なものではない。聴く者の情感にそっと入り込む、いわば奉仕するロマン主義なのです。

——今シーズン、ブルックナーは一つの柱となります。スダーンさんは、ほかに第8交響曲を。他の指揮者が演奏するものを含めれば、第4と第5もあります。

スダーン：これにベルリオーズ、リスト、ショパンを加え、「シューマン以後」を完結させる。きたる2年間で、私は古典的レパートリに近現代のレパートリを交えてゆき、そうして10年間でオーケストラがやるべき演目を一巡する算段です。これは楽団はもとより、私自身を教育することでもあるのです。この素晴らしいオーケストラと、このような素晴らしい音楽の旅を共にできるのは、大きな喜びです。

——どうもありがとうございました。



ふなき・あつや
1967年生まれ。音楽評論家。「読売新聞」で演奏評を、NHK-FMでクラシック音楽番組の解説を担当。「レコード芸術」「ぶらあぼ」などの音楽雑誌、コンサート・プログラムにも多数寄稿。東京芸術大学ほかでドイツ語講師をつとめる。共著に『魅惑のオペラ・特別版：ニーベルングの指環』(全4巻、小学館)、『地球音楽ライブラリー：ヘルベルト・フォン・カラヤン』(TOKYO FM出版)、共訳書に『アドルフ 音楽・メディア論』(平凡社)。